
どうやら僕は二重人格らしい

Twice

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうやら僕は二重人格らしい

【Nコード】

N7680Y

【作者名】

Twice

【あらすじ】

少年は出会う。歴戦の王の記憶を継ぐもの、最強の力を持つものたちに。少年は想う。この力は誰かを守るのか、と。答えは未だ見つからない。だから少年はゆっくりと歩き始めた。共に集う仲間達と。。。

どつやら僕は二重人格らしい(前書き)

新しい小説です可愛がってください。

どうやら僕は二重人格らしい

朝起きて、朝ごはんを作り、それを食べ学院に向かう。何も変わらない日常に新たなスパイスが加わったのは春だった。

St. 学院と呼ばれるこの学院は初等科と中等科に別れており、エレベーター方式で上に向かって行く。そんなハイレベルの学院に通う生徒が1人、始業のチャイムが鳴ったのにも関わらず学び舎の外を歩いていた。男のようで、少々ズボラなのか寝癖が所々あるが、何処か愛嬌のある顔立ちをしている。

少年は眠たそうに欠伸をすると、辺りを見渡し、ちょうど良い木陰があつたのか、見つけると一目散に走って行き、腰をおろした。

寝そべると新しいクラスになった初日のことを思い出していた。今思えばあれこそが最大の失態であつたと、唇を噛み締めながら。

「新しい仲間たちと交流を深めるために自己紹介をしましょう」

もはや呪いのレベルで存在する恒例行事、自己紹介。物静か人にとっては苦痛、快活な人にとっては屁でもないであろうこの行事の前に、エリアス――先ほどの少年である――は大変困惑していた。

『エリアス・オルバ』という名前ではやはり最初の方にきてしまう。自称シャイなエリアスには、中々難しい注文である。

『俺が代わりにやってやるうか？』

幻聴まで聞こえてくる始末だ。どうしようか、迷ったのも束の間目の前の席のストラトス？ という少女の自己紹介は終わっていた。

まるで処刑台に向かう死刑囚のように、俯きながら前の教段に行く。心配ない、僕には出来ると、心の中で呟きながら。

「エリアス・オルバです。好きな事はスポーツをしたりすることで
す」

ああ、言えた。良かった、これで安心して学院生活が過ごせる。エリアスは心の底から安心した。しかし……。

『面白そうだなあ、代われよ』

油断した。完全に忘れていた。さっきは空耳と思い無視したが、こいつに今度は乗っ取られる。

さようなら、僕の平和（予定）の日常、こんにちわ、クソつたれな日常。エリアスは身体の中に押し戻される感覚を味わいながら、律儀に挨拶をしておいた。

「よろしくお願ひします。…このクソ童貞と尻軽女共」

ピシ…！

教室の空気は凍った。エリアスの意識はここでシャットダウンされた。

S i d e エリアス

そこまでが覚えている事だった。気づいたら家で寝ていた。恐らくもなにもその日の内に僕のこととは学院中を駆け巡っただろう。あらぬ尾ひれをつけながら。

「なんであんなことしたんだよ」

誰もいないけど言葉にする。答えは自分の中から聞こえてきた。

『駄目だったか？ 俺は楽しかったぜ』

この時点で僕はもうあきらめる。どう言っても無駄だとわかっているから。けど、納得がいかない。先生には僕が二重人格だと話を通していているのに、どうやら何も説明はないらしい。

行きたくないな、そう思うと運が良いのか悪いのか、1限目のチャイムがなり終わった。

教室の前に立つと物凄く心臓がバクバクしてきた。今度はオチを知っているのにタイタニック号に乗った気分だ。死亡フラグだ。

初日の印象が悪いのに加えて、1限目をさぼるといふ快挙。僕は不良になりたいのだろうか？ 答えは無論NOだが。

そうだ、きつとみんな純粹だから童貞とか尻軽女とか意味を知らないはずだよな！？ そうだ、きつと大丈夫だ、問題ない。

僕は勇気を振り絞ってドアを開けた――！

そして、速攻で閉めた。

……死ぬほど睨まれた。

『チヨ一受けるWWW』

絶対あいつSだ。傷口に塩を塗りこんでお湯につけるやつだ。泣きつ面蹴ったり殴ったり祟られたりとはこのことか！

もう、僕の豆腐メンタルは粉々だ。黙って教室に入ろう……。やっぱり睨まれたけど。

そして、昼休みになって。

「おい、ちょっとお前ついて来い」

見知らぬクラスメイトが僕を呼ぶ。

『あ、あいつは俺がー1番貶したやつだな』

え？ つーことは間違いなくパシリとかリンチフラグだよな？ 痛いのは勘弁だな……。

「おい、なんかいったらどうなんだよ!!」

「お前、こいつ怒らせるとマジハンパねえぞ!!」

「俺たちは知らないからな!」

僕はまずあなた達ことすらわからないんですが…。どうしょ、このままじゃ余計な事まで起きそうだし、ついて来うかな。

「…わかった」

「素直に来ればいいんだよ」

目の前のクラスメートよりもあいつが余計なことをしないか心配になった。喧嘩とかだったら勝てるだろうけど、したくないなあ。

どつちら僕に問題らしい(前書き)

週に一回、月曜日に更新を予定しています。

どうやら僕に問題らしい

エリアスが連れてこられたのはグラウンドだった。しかし周りに植えてある木々によって辺りからは死角になっている。

クラスメートの3人、仮にA、B、Cとしよう。いわゆる悪ガキ3人トリオだ。中等科生活2日目にして、既に厄介なやつらに目を付けられていた。

「テメーよう、なんだよあの挨拶はよう。俺たちに喧嘩でも売ってんのか？ アアン!？」

「別にそんなわけじゃないですよ……」

正直言ってエリアスはとても面倒臭かった。お腹が空いた、すぐにご飯が食べたい、と心中思っていた。しかし、それは叶わない。

なにせ3人だ。1人なら問答無用で黙らせていたが、なにぶん分が悪い。楽に事態を収束させられるか、考えているとB（リーダーっぽいのがAだ）がエリアスに突っかかってきた。

「何とか言ったらどうなんだよう、この野!!」

直後、痺れを切らしたBがエリアスに殴りかかってきた。微かな残像を残しつつその拳はエリアスの頬に届く……! 筈だった。

「人が折角何も起きないように考えていたのに……」

拳は頬の手前でエリアスの手によって止められた。そのことに、3

人は動揺する。

「殴ってきたのなら、殴り返されても言い訳出来ないよね」

「ぐあ…！」

エリアスは掴んだ拳を握りつぶそうと力をいれる。Bの表情が苦痛を訴える。拳はフルフルと震え、全身から冷や汗が溢れ出してくる。

「て、てめケンジをよくも？」

「ここなら、誰も見てないし…魔法を使ってもいいんだよ？」

「「！？」」

通常、市街地等で魔法を行使するには特別な権限や急を要する場合、限られた場所等では出来ない。それはこの学院内においても同様である。

すなわちエリアスの発言は相手を小馬鹿にしているようなものである。

「上等じゃねえか、そっちがその気な」

「タケシ！？」

「油断大敵だね」

言葉よりも拳は速く。タケシと呼ばれる少年の鳩尾を貫く。たったの一撃で意識を奪い取る。

「さあ、君はどれくらいなんだい？」

「く、くそがー？」

魔力がたいして纏まらぬまま打ち出された力の塊は、糸もたやすくエリアスの拳によって碎かれ消滅していった。

「こんな筈じゃない、こんな筈じゃなかったんだ？」

後悔先に立たず、己を知り敵を知れば百戦危うからず、どの言葉でも形容できよう。間違いではなかった。ただ彼らは知らなさ過ぎただけだった、彼を、エリアス・オルバを。

エリアスは1歩ずつ歩いて行く。その間にもシューターは打ち出されるが、遠く及ばず消えていて行く。そして、彼の目の前にエリアスは立ち塞がった。

「Good luck」

無慈悲にそう呟き、最後の1人に一撃を屠った。

結果、あの3人は何も出来ず一方的にやられただけだった。エリアスが3人を一目見て去ろうとした時、ふと何もいない筈の1本の木

を見た。が、すぐに腹の音がなり踵を返すように教室へ弁当を取りに帰った。

何も得られなかった、と思いながら。

S i d e 謎の少女

気付かれた、いや気付いていたのでしよう。私が彼らを追いかけて、木の後ろに隠れて様子を見ていたのを。

あの3人は何も出来ず一方的にやられただけだった。しかし、あの人は違った。魔力の強化も無しに3人を相手にして一撃で倒し、まるで蟻を踏み潰すだけのように簡単に終わらせてしまった。

まだまだ底知れない力を持っている彼と是非1度戦いたいと思った。しかし、私の当面の目標は現代を生きる聖王女のクローン。彼にお手合わせを頼むのは、それからでも遅くないでしょう。

S i d e エリアス

昼休みは思いのほか短く、帰ってきた頃には昼休みは終わりを告げていた。

『どういふ心境の変化だ？』

『何が？』

質問を質問で返すのはやぶさかではないが、もう1人の自分なのだ。気にしない。

『いつものお前ならヤツちまったりしねえだろう』

『そんなことか。単純に自分の欲求を満たそうとしただけだよ』

『破壊衝動か？』

『食欲だよ！！』

わかっていてこれだから困る。それより、あの碧銀の髪の人。なんだあんなところに？

考えてもわからないか。とりあえずは……。

『ヒソヒソ…あの3人帰ってこないよ』

『きつとやられたんだ…ヒソヒソ』

この状況は好ましくないよね……。どうにか出来ないかなあ？

放課後になって、職員室に呼ばれた。絶対さっきのことだろう。謹慎処分とかいやだなあ。 謹

「失礼します」

ドアを開けると、さっきの3人と恐らく、その母親、そして教師のシスターがいた。

相手の母親からは物凄いオーラを感じる。怒りのオーラ。修羅に見える。えてきた。

「エリアス君、ここに座ってください」

僕らのクラスの担任教師でもある彼女に椅子に座るよう促される。

「先生、これは大変な事態ですよ。校内暴力なんてもつての他です。うちの子は怪我をしたんですよ!!」

怪我をさせるほど強くはしてないのにな。速く帰りたい。今日は筋トレの量が多めなのに。

「ほんと、どついう教育をしているんでしょう?」

まったくだよ。教育がなってない。弱すぎだよ、真面目にトレーニングしてないのかな?

「そういえば、この子の親はまだなんですか? いい加減怒りますよ?」

「親なんていませんよ」

「「「!?!?」」」

「ちよ、エリアス君!?!」

僕の親なら昔に死んだ。別にどうと思わない。あんな屑共はもっと早く死ねばよかったのに。

「ブツブツ…親に捨てられたのね。教育してもあんなのだから、捨てられて当然ね」

「うちの子がいかにもデリケートかも知らないで怪我を負わせたのね。許せないわ」

そのセリフに3人は身体を1度ビクツとさせ、俯いた。

「こんな子は退学でいいんじゃないのですか!？」

さつきから先生は矢継ぎ早に言われるので困っていた。勝手に脚色されたな。僕が3人を一方的にやったみたいじゃないか。結果はそうだけど、実際は相手から殴ってきたのに。

『代わってやるうか?』

『いやだ、どうせ火に油を注ぐだけだし』

確実に状況は悪化するであろう。余計面倒なことになる。正直に言っても聞きやしないだろうし、どうしたものか。

「・・・失礼します」

突然、職員室に響く凜とした声。全員がその声のした方向を向いた。

「ストラトスさん? 今は入らないで頂きたいのですが・・・」

「先生、オルバさんは悪くありません」

行き成りの発言に先生はびっくり。周りもびっくり、僕もびっくり、俺もびっくり。

「ど、何処にそんな根拠が・・・!」

「私がこの眼でしっかりと見ました」

そう言っつて、自分の眼をしっかりと見開いた。彼女の眼は虹彩異色、それも蒼と紫の…。

碧銀の髪に加え虹彩異色。

ああ、きっと彼女は…。

早合点か、そう思い考えをストップさせる。彼女の眼に見とれていた親どもが気を取り直す。

「その「母さん、俺たちが悪いんだ」!？」

何かを言おうとした時、あの大将の子が口にした。いや、僕も悪いんだんだけどね。

「俺たちがエリアスさんのことをよく知らないで……」

その言葉に2人もしゅんと俯く。てか、エリアスさんって何？

結局、親の暴走はこれで治まり事件は解決に向かって行った。余談であるが、僕たちの担当教師の人は始めて僕という特殊なケースにぶち当たったそうで、説明が下手だったらしい。

安西先生、学校が辛いです……! !

どっちら僕に問題らしい(後書き)

ストーリーは進まない……！

これがTwiceクオリティ……！

とじつは僕は出会っさい(前書き)

テストが…終わりました…2つの意味で。

どつやら僕は出会つたらしい

あの後、お互い様ということになって事態は収束した。帰る頃にはもう、5時を過ぎようとしていた。

「ストラトスさんだっけ？ さっきはありがとう」

「いえ私はそんな…」

「謙遜しなくてもいいよ、君のお陰で何ごともなかったんだから。そつだ！ 今度何かお礼をするよ」

「そんな、私は何もしていませんし…」

「今日迷惑をかけちゃったからそのお詫びに、ね？」

『とことんお人好しだな』

『づるさいな』

途中、横槍も入ったがインハルトにとつてもこれは魅力的な持ちかけであった。どつやって彼にお手合わせを頼むかは、考えなければいけないことだった。

「そ、それでは…時間の許すときでいいのでお手合わせをお願い出来ますか？」

「へっ？」

エリアスが素っ頓狂な声を出したのは考えていたことの斜め上をいくことだった。

今思えば彼女が何故さっきの喧嘩（一方的にやった）を覗き見していたのか。単なる物好きでは済まされなかったのがようやく合点が合った。

「うん、僕でよければ」

「ありがとうございます、オルバさん」

「…オルバじゃなくて、エリアスって呼んでくれない？　なんか堅苦しくって…」

この名前は、僕の名前じゃないから…と言おうとして、口を引っ込めた。言うべきじゃないと思って。

「？…わかりました。それでは私のことはストラトスではなく、アインハルトと呼んでください」

「え…？」

予想外だった。いや、最近の女の子はうんたらかんたらだとエリアスは聞いていたので動揺するのも少しだけだった。

「では、さようなら。エリアスさん」

「う、うん。さよならアインハルト」

スカートをふわりとさせ去って行くアインハルトを見送りつつ、エ

リアスは今日の晩御飯のことを考えていた。

「ねえ、今日の晩御飯何がいい…オルバ」

『肉』

「野菜炒めでいっか…ハア」

『お前も大層Sじゃねえか』

最後の言葉には耳を傾けず、玄関に向けて歩を進めて行った。

S i d e エリアス

「今日は安かったなあ。結構買ったけど、全部食べ切れるかな」

勿論、今日で全部食べ切る大食い属性なんて持ってないけどさ。

今日は大分予定が変わってしまった。本当なら帰って来て筋トレ、ランニングが終わったあとに晩御飯って予定だったのに。

「早く家に帰ろう……?」

視界の隅、近くのロッカールームに見覚えのある少女が横たわっていた。あれは…。

今日知り合ったばかりのアインハルトだった。

流石にあんなところで寝てるわけないよね。酒によったおっさんでもあるまいし。けど、危ないよね。何処に犯罪者が隠れているかわからないし。

アインハルトって普通に可愛いし。

男子たちが何故狙わないのかがわから…僕クラスの状況わからないんだった。

「アインハルト?」

とりあえず近くに行つて声をかけて見る。怪我はないように見える。呼吸も脈もちゃんとしてるし…過労で倒れたとか?

どちらにせよ、彼女が起きてくれないと事情はわからない。僕は彼女の家の住所を知らないから家に上げるしかないのか…?

あれこれ考えている内に僕は背後に迫つた人影に気づかなかつた。その人影は僕に近づき、そして……。

「わっ！」

「!？」

…僕を驚かした。

「びっくりしたじゃないですか、スバルさん」

「あはは、ごめんごめん。けど、どうしたのこんなところ？」

「いや、知り合いがなんかここで倒れていたの…」

今日知り合ったばかりとは言わなかったが、さしたる問題もないよね？

「この子が例の…エリ阿斯、家にこの子を運んでくれない？」

「えー、スバルさん力持ちじゃないですか」

「女の子を抱っこできるのもこれが最後かもしてないよ？」

…したらしたあとで弄られそうだけど、スバルさんは僕に運ばせようとするしなあ。

「わかりましたよ」

「そう言ってくれると思ってたよ。ただしセクハラしたら逮捕だよ？」

「よいしょっと…しませんって……？」

アインハルトを背負い終えた僕にスバルさんは手を伸ばしてくる。僕は両手が塞がっているのに。

「ほら、早く荷物を」

「これぐらい持てますよ」

多少バランスが悪いが落とすようなへまはしない。アインハルトは羽のように軽いから。

「そこはお姉さんにまかせなさい！」

よく育ったメロンのような双丘を揺らしつつ、自身たっぷりと胸に手を当てる。荷物はいいのにアインハルトはダメとはこれいかに。

「はあ、ではお願いします。けど結構重いですよ？」

「大丈夫だよ、私は力持ちだから！」

そんなスバルさんはおいという、問題は後ろの王女様だ。女の子特

有の甘い香りと、成長段階にあるやわらかいふにふにした感触の例の言ってしまうえばおっぱい…！

閑話休題

「……わたしは…重い…ですか…？」

寝言だろうか？ アイんハルトが眠気まなこで尋ねてきた。

「大丈夫だよ。とつても軽いから」

「そ…そんな…ことない…ねすよ…zzzz」

どうやら再び眠ったようだ。4月とはいえ、夜は冷える。汗もかいてるから早くスバルさんの家に届けないと。

「…なんですか、その顔は…」

「いつやー、なにもー？」

あれだ、ニヤニヤした顔だ。何が楽しいのやら。あとで弄られるときは面倒そうだな。ティアさんがいると余計面倒そうだな。

「スバルさん、今日はティアさんはいるんですか？」

「うん、いるよー」

終わった。泣きたい。

『ワロスwww頑張れよ。俺は寝るわwww』

こいつ、腹立つ…！

無論、この後スバルさんたち2人に弄られたのは他でもない。この
屈辱、いつ晴らすべきか…！

とじちやら僕は出会つたじい(後書き)

伏線らしきものその1、オルバキゅん。

どうやら僕はラッキースケベらしい(前書き)

ペルソナ4……面白いではないか!

Fate/Zero……ギル様の出番増えないかな

未来日記……トウエルフス面白いwww

どうやら僕はラッキースケベらしい

買った物したものは冷蔵庫へ、寝ているアインハルトはベッドへ、そして僕らは夕食へ。

2人は僕の料理が久しぶりに食べたらしい。あんまり上手ではないのだけど。

今日は宣言通り、野菜炒め。それだけでは物足りないのでコンソメスープも作ってみた。

そしていざ頂きますと言おうとしたとき、事件は起こった。

スバルさんが『ノーヴェがない』ということに気づいた・・・！

探しに行こうとして玄関を開けるとそこにはノーヴェが倒れていた。これには3人もびっくり。すっかり憔悴しているノーヴェに何度も謝り、まあ、ことなきを得た。

結果、4人で夕食を食べることになったのだが、真の悪夢の始まりはこれからだった？

S i d e o u t

「結局、アインハルトに負けたんですか、ノーヴェ？」

「うるせー、あたしだって手加減とか考えてたんだ！」

夕食中、エリアスが何故アインハルトはあんなところで寝ていたのかという質問をスバルにした。

それをエリアスに説明し終え、結論だけを端的に言えばノーヴェが負けた話だとエリアスが言った。

「本気で戦ったらどれくらいですか？」

「結構押されると思うけど、まだまだあたしには勝てねえな」

「まあ、負けてたら面目丸潰れですよ」

「…今回は油断しただけだ」

そして、夕食を食べ終え、食器を洗い終えたエリアスに襲いかかる新たな試練。それは男たちが今までどれだけ夢見て潰えてしまった理想郷の1つ……。

混浴である……！

26分前

「エリアス、食器洗った？」

「全部終わったよ」

「流石は私の弟！」

「いつ僕がスバルさんの弟になったんですか……」

14分前

「エリアス、貴方明日どうするの？」

「どうするって、学校か。サボりたいな」

「……もうすでに墮落思考ね。最初あったときは、どうなるかと思っただけ……」

「言わない約束ですよ、ティアさん」

「そうね。それと…いつになったらお母さんって呼んでくれるのかしら?」

「僕はあなたに保護されてますけど、息子になった覚えはないですよ、残念でしたね」

「お母さん、悲しい」

「棒読み乙」

5分前

「今日はトレーニングしないのか?」

「あー、忘れてました。面倒でもう風呂に入ります」

「お前は私の弟子だろ? ちょっと付き合えよ」

「…僕が、いつ、どこで弟子になったんですかー!」

「お、怒るなって…」

「3人共、僕の知らない間に何勝手に決めてるんですか!……もういいです、風呂に入って来ます」

くそして現在へく

髪と身体を洗い、ゆっくりと湯船に浸かる。ふうくと全身の力を抜いて息をはく。

すると、脱衣所からコソコソ小さな声で話しているのが聞こえた。心臓がドクンと高鳴る。息苦しい、喉を手で抑えられているように。

そして、地獄の釜は開かれる。

「な…なな、なんで風呂に入ってくるんですか!？」

「…家族（師弟）のスキンシップ?」「」

「ちょ、動いたらバスタオルが落ちますよ!？」

ハラリ×3

そこには、素晴らしき桃源郷が広がっていた。野郎共が夢見て止まない全て遠き理想郷がこの風呂場に降臨していた。

この3人は普段から鍛えているだけあって、腰はバツチりくびれ、出るどころ（主に胸部）はバツチりとでている。ボン・キュ・ボン！を体現した3人である。

エリアスは咄嗟に眼を手で隠し横を向くが、やはり男の子なので、あの爆弾（色んな意味で）に目がいつてしまう。その度に顔の温度が上昇し、林檎の如く赤く染まる。

「ほらエリアス。落ち着いて。何処かに当たって怪我をするわよ」

「これが落ち着いていられる状況ですか？ 早く風呂から出てってくだs「ほにゅん」にゃ？」

ティアナはエリアスを抱きしめた。そう、全裸で。あの巨峰のおっぱいに顔を包まれたのだ。それにより、エリアスの思考回路は一時的にショートを起こし、しばらくの間起動をしなかった。

「もっと甘えてくれていいのに…」

再起動すると、ティアナを押しつけ脱出すること無きを得たかのように思えたが、押しつけた時に掴んだ場所はご想像のとおり、例のアレでさらに脳と顔が沸騰、そのあとの視界に入ったものは、スバルとノーヴェの巨峰だった。

風呂の蒸気によって、3人の顔が自然と赤く染まり最高級に美しさを生み出し、かの少年からは深紅の迸るパッション、即ち鼻血がア―チを描いていた。

エリアスは風呂場で貧血になり、ベッドに運ばれた。

そう、アインハルトがいるベッドへと…。

S i d e アインハルト

夢を見ていた。それは霸王イングヴァルトと聖王オリヴィエの幸せな日々。雪原豹と戯れる2人の思い出が鮮明に映し出されていた。雪原豹はあの時代兵士でありパートナーでした。

彼らは共に戦い、共に勝利し、そして敗北して共に死していききました。そんな戦いの中での暖かな日々。誰もが望んでいた幸せに満ちていた日々でした。

今日の夢は臆げではなく、いつもよりハッキリと観えていた。しかも自分が夢の中にいるかのような。いつもは額縁の外から覗くだけだったのに。

そう思いながらも、今日は珍しい夢なのでじっくりと周りを見ることにした。緑が映える草原と木々。そして巨大な城壁があるのが眼に観えた。

2人の方を再び観るとまだ戯れていた。そして私は2人を見守る男の人を見つけた。木にもたれながら何故だか悲しそうな瞳で見つめていたが、やがて何処かに行ってしまうた。

私は初めてだった。こんなにもハッキリと2人以外の人を観てたのは。その人の何処かで見たとあるような風貌は、出会ったばかりの彼を、エリアスを何故か彷彿させた。

そして…夢は醒める…。

S i d e o u t

小鳥のさえずりが耳に入る。アインハルトはまだ重い瞼をゆっくりと開けていく。あれ？ 私は何故ベッドに寝ているのだろうか…？という疑問をまだ覚醒しきってない脳に思い浮かべる。

疑問を解消すべく、アインハルトは身体を起こそうとするが違和感を感じた。

何かが邪魔をして起き上がりにくい。その正体を知るべくアインハルトはシーツを払いのけた。

話は変わるがエリアスは朝に弱い。特に前日に何か大変なことがあったのならなおさらである。

それでも普段から一人暮らしをしているので朝は弁当をつくり、遅刻しないように学校には行ける。

しかし、一昨日は失神 + 貧血で倒れ、それからずっと寝ているのだ。今日も起きないだろう。

まあ、つまりそういうことだ。

S i d e アインハルト

「え……？」

ベッドの中には彼、エリアスさんが眠っていた。お、落ち着いてください。私。これでは大人の階段を上ったようじゃないですか。

これは、そうです。事故ですよ。きっと何かがあったに違いありません。決してやらしいことがあったという意味ではありませんよ？

エリアスさんの寝顔があどけなく可愛いか時々出る吐息が色っぽいかそんなことを考えていませんよ！？ 本当ですからね！

コホン、閑話休題です。決してやらしい気持ちは私にはありませんので、気持ちを切り替えるのは簡単です。…あ、柔らかそうな唇…。

「いい…匂いがする……」

ダキッ、ギユウ。

不意にエリアスさんに抱きつかれ驚き、顔が真っ赤になった。

しかし。

しばらくすると、エリアスさんの身体が震えているのに気づいた。

「…痛い…痛いよ…父さん…殴らないで…いい子でいるから…
…母さん…」

涙を一筋流しながらエリアスさんが言ったことは、明らかにある可能性を示唆させるのに十分でした。

それは…。

虐待、それも親からの。

確か今日彼は言っていた。自分には『親がない』と。おそらく虐待から守るために、彼と両親を遠ざけたのでしよう。

心臓が握りしめられたような感覚になり息苦しくなる。彼の身体はまだ震えていました。私に出来ることは、何かあるのでしょうか…。

そう思うと、自然と手がエリアスさんの頭に向かっていました。彼の頭を優しく、私が母親にしてもらったように撫でました。

5分程すると、「すう、すう」と穏やかな寝息をたてて赤子のよう

に眠りました。

「良かった…」

心のそこから安心した。彼が、エリアスさんが気持ちよく寝ているのを見ていると、なんだか…こっちも…眠くなってきました…。

そして、私はそのままエリアスさんを抱きしめたまま眠ってしまいました…。

ガチャリ、と音をたてて第一の歯車は収まり、物語は少しずつ動き出すー！。

始業式、僕がオルバに選手交代を余儀なくされた自己紹介の日の、
帰ってきてからを話そう。

操られて、意識を失い目が覚めると家のソファに眠っていた。現在
時刻は3：26。晩御飯には早過ぎて、トレーニングには微妙な時
間だ。

とりあえず、デバイスをいじることにした。簡単な修理なら僕にも
出来るので、時間つぶしにすることにした。

「エル？ どこにいるの？」

『じ、ここです〜』

声がした方を見ると、ちっこい小人が本の間に挟まっている。また本を読んでいてうっかりして挟まったんだな。

本をパラッと開くとエルー正式名称はガブリエルであるがーがちよこんと座っていた。

「ありがとうございます、マイマスター」

「いって。エル、ガーディアンはどこにある？」

「エルがきちんと持ってるです」

「偉い、偉い。修理をするから貸してくれる？」

「シンディさんに頼まないんですか？」

シンディさんとは、このエルやガーディアンを造った凄腕のデバイスマイスター。エルはどうやら最初から造ったわけではないらしい。ユニゾンデバイスを造るのは難しいようだ。ガーディアンはナックル型のインテリジェント・デバイス。スバルさんみたいに重たくないけどね。

あとシンディさんはものすごく興味のない物には無関心な人で、食事も放っておくと食べないらしい。結婚していて良かったね。

「簡単な修理だけだから自分ですよ。エル、晩御飯は何がいい？」

『肉っ？』

「了解しましたです」

いつも魔法の練習をする公園までは大体1時間ぐらいで着く。今日は50分を切りたいところだ。

玄関の鍵をしつかりとかけ、いざ鎌倉！…って言うけど、どこなんだろ？

公園に着くとまだ誰もいなかった。これなら広く場所を使えると喜んだ。

ちなみに今回のラップは52:15・12。流石に50分を切るのは難しいか。けど、少しずつ速くなっているから、いつかは切れるだろう。

「今日のメニューは？」

「はい！今日は目指せ50mのお城です！」

「もう50mまで来たか。最低使用枚数は？」

「500枚です！途中で維持出来なくなると最初からです！」

「了解、ではいってみよう！」

基本となる壁は、反射と防御を混合させた防御壁。それを大きくし

たり、小さくしたり、柱状にしたりと幅広く形を変え組み立てていく。

横幅は大体30mぐらい。こっちはあんまり意識しないから日によって長さは変わる。

これを魔力を抑制させた状態で行う。かなり疲労が溜まるので、3日に一回ぐらいのペースでしている。

見栄えも考え色々している内に、30分が経ちようやく完成した。

すると、視界の隅に見知った顔の人がいた。こちらに気づき手を振ってくれる。2人いて、1人は茶色の髪のお姉さんでよく知ってるんだけど、もう1人が見たことあるような、ないような。

「高町さんじゃないですか、こんばんは」

「こんばんは。もうなのはさんでいって言ってるのに…。いくら言っても聞かないね」

「いや、慣れないもので…。そちらはヴィヴィオのお姉さんですか？」

「「ブツ？」」

「？」

突然の吹き出し。わけがわからなくてわけわかめ。言い辛いし読みにくいね。

「え、もしかして…ヴィヴィオなの？」

「うん！ じゃじゃーん！ 新しいデバイスをね今日買ったの！」

「それは良かったね。どう？ 一回手合わせする？」

「いいの！？ けどお兄ちゃん疲れてない？」

「大丈夫だよ。まだまだ行けるさ」

ヴィヴィオは僕のことを何故かお兄ちゃんと呼ぶ。よくわからない。まさにわけりy。

本音を言えばイツパイイツパイなんだけど、こんなのでへこたれていたら、兄としての威厳がない。

「こっちは準備運動は終わってるよ。どっからでも掛かってきなよ」

「それでは…行きます…！」

突撃と共に鋭いボディブロー、それを軽く捌き、続いているハイキックはしゃがんでよける。腰の回転を利用した鋭い左の蹴りは、防御壁を展開し防ぐ。

しばらく拳の攻撃が続いていたが、全てギリギリでよけるか、勢いが乗る前に捌き防御主体の戦いをしていった。

「今度は…こっちから行くよ！」

「！？」

一瞬の隙をみて、懐に入る。それにすぐさま気づき後退をするが、すでに遅く魔力刀で脇腹を突き刺す。

「ッ！」

魔力刀は刀と同じ斬れ味だ。斬撃か魔力ダメージの違いだけ。より細く、より鋭くすることで斬れ味は上がるし、それに刃こぼれもない。

唯一の欠点は、思いのほか操作が難しいことぐらいだろう。

そういえばオルバが言っていたね、『これを無意識に出来るようになりゃ、俺に近づくことが出来るぜ』って。

あいつの攻撃は恐いんだよね。詳しいことはわからないけど、何でも切れるって言ってた。僕の防御壁は切れるのかな…。

「ちなみに脇腹は人体の急所で神経が集まってるんだ。今ヴィヴィオが味わっている痛みは刀で切られたのと同じだよ」

「うう、痛い…」

「だ、大丈夫ヴィヴィオ!？」

急いでヴィヴィオに駆け寄る。力の加減を間違った!? なんにしても、高町さんと呼んだほうが…。

「ちょっと見て欲しい…お兄ちゃん」

うっ、そんな子猫のような瞳で僕を見つめないで！ 行きます、行

きますから！

ヴィヴィオのそばに駆け寄り、当てたところを見ようとすると、「もつと近づかないと見えないよ……」と言う。正直とつてもドキドキした。

息が肩にかかるくらいまで近づくと、僕の顔は赤くなっていた。ヴィヴィオからほのかに香るシャンプーの香りが鼻腔をくすぐる。よく見ると、ヴィヴィオも顔が赤くなっている。

「えと、ここ……だよ……ムギユ……」

突然顔面に襲いかかるやあーらかい感触。それは間違いなく男たちの聖域、おっぱいの谷間であると確信した……！

「い、いいお〜（ヴィ、ヴィヴィオ）！？ は、ははして〜（は、放して〜）！？」

「ふふ、やつと捕まえた？」

身体はがっちりと両腕で固定され動けない。しかもあの肉厚な2つの谷に囲まれて呼吸も出来ない。このままでは色々とまずい……！

「こ、これで私の勝ちですね……」

く、騙された！ これも勝負の一つだったのか！ ムニユムニユとした感触はまさに僕得としか言いようはない。

抜け出そうとすれば抜け出せるが、男の性というものは非常に厄介ですつと埋もれていたとゆう欲求が空気を求める欲求に勝ってしまっている。

しかし、それは刻々と逆転していく。

ヴィヴィオは恥ずかしがってるのにいつまで経っても離れてくれる気配がない。いや、出来れば離れてほしくはないけど、呼吸が出来ないからね!?

ここは一つ我らが白き魔王様に助けを求めるほかない――!

『誰が魔王だと・・・?』

『ごめんなさい! つい言葉のあやで!』

『釈然としないけど…まあいいよ。でお困りのようだけど?』

『見ての通り絶賛肉体的バインド中です。助けてくださいよ!』

『いいけどね、さっきの魔王様発言は私の不屈の心を傷つけたよ…』

『不屈の心をなの!? ってすみません、高町さん!』

『だから、なのは。なのはさんって呼んで? そうしたら助けてあげる』

『わかりました! 助けて下さい、なのはさん!』

「こら、ヴィヴィオ。エリアス君が困ってるでしょ!」

「はっ、म्म…」

「そこはね、もっと優しく抱きしめて、頭も撫でてあげるといいんだよ?」

「はい、ママ!」

『謀ったなー!?!?』

『一応助けたよ? 呼吸できるまでは。それに私は愛娘の恋は成就してほしいと思ってるから...』

『言ってることがわけわからない!? 結局このままですかー!!』

「キヤツノノノノ」

このあと開放されたのは10分後であった…。正直、あと5分遅かったらヤバかった…。

朝から夜までずっと疲れることだらけだった今日は、とてつもなく眠たかった。お休みパトラッシュ。

次の日、遅刻したのは言うまでもない。

どつやら僕はラッキースケベらしい(後書き)

受験……合格出来るかな……。

とろろやろ色々あるらしい(前書き)

お気に入り登録していただいた方、ありがとうございます。

とつやら色々あるらしい

Sideエリアス

夢を見ていた。昔の。両親が死ぬ日だったのか、そうでないのかは、わからない。

毎日が虐待の日々だった。その傷跡は3年が経った今でも殆ど残っている。根性焼きなんか100を超えると数えるのをやめた。

しばらく見ていなかったのにまたなんで今日見たのだろうと、自身に腹が立つ。

殴られ、蹴られ、一生残るかもしれない傷をつけられるのを甘んじて受け入れるしかない夢の筈なのに…今日は違った。

突然、夢は変わり暖かいなにか包まれていた。

初めてだった。安心出来た。いつも家で一人ぼっちで居て安心なんてした事はなかった。

夢はだんだんと覚めていく。名残惜しいが夢は所詮夢。だけど感謝しよう。この温もりは心の中に残るのだから。

『ありがとう』

Side out

エリアスは割とスパツと起きられた。あの夢のおかげだろうと思いつながら、今自分が置かれている状況に気づき絶叫をあげた。

朝ご飯というものは、1日を過ごす上で実に重要であるかは、身をもって知っっているだろう。

朝ご飯を抜いた日は、それはそれはつまらない日になってしまふ。かくゆう自分も休みの日は朝ご飯を食べないときが多く、いつもぼーっとしている。

何が言いたいのかと言えば、それは『朝ご飯はしっかりと食べよう』という事だ。

- たとえ、ものすごく弄られるとしても、だ。

スバル家の食卓を囲む人数は、今日に限っては多い。スバル、ティアナ、ノーヴェに加えエリ阿斯とアインハルトがいるからだ。まあ、エリ阿斯は時々スバル家の食卓にお邪魔する事は多々ある。

しかし、最後の2人は顔を真っ赤にしながら朝ご飯を食べている。

あの後、エリアスの絶叫に気づき料理中のスバルを除く2人が部屋に向かった。

そこではエリ阿斯がアインハルトに寝ぼけてヘッドロックをかけられていた。ノーヴェは頭を悩ませ、ティアナは呆れていた。

アインハルトの意識が覚醒し、おかれている現状を理解すると、顔を真っ赤にしてエリ阿斯に空中散歩をプレゼントした。幸か不幸か、窓が空いていた。

流石のエリ阿斯も驚きはしたが、冷静に対応し、衝撃を吸収するウォールを展開しことなきを得た。かのように思えたが、急ごしらえの簡易魔法なので結局は壊れて落ちてしまった。

まあ、当の本人は最近の役得の罰だと考え、納得していたらしいが。

そんなことがあり、2人は謝りあったり、周りに弄られたり。ラジバンダリ。もうあの人が消えたよね…。

「んじゃ、一応説明しとくぞ」

ノーヴェが音頭を取り、やっと説明が開始される。ちなみに朝ご飯はベーコンエッグと野菜スープ（スバル作）。あの大食いの彼女の料理なら美味しいだろう。

彼女の分だけ、一週間は胸焼けを起こしそうな量だったりする。明らかに胃のキャパシティを超えているのだが…。深くは掘り下げないでおこう。

「ここは、こいつ……あたしの姉貴のスバルの家だ」

「うん」

アインハルトにわかりやすいようにスバルが相槌を打つ。そしてそれをアインハルトが目で追う。

「で、その姉貴の親友で本局執務官」

「ティアナ・ランスターです」

「そんで、こいつは…」

「僕のことは知ってるからいいよね？」

「はい」

「? 知り合いだったのか」

ノーヴェが頭に疑問符を浮かべ2人に尋ねた。そういえば、エリラスとティアナ、スバルの話をしていなかった気がする。それはまた今度という事で…。

「一緒にのクラスだからね(です)」

「成る程な。まあ、お前を保護してくれたのはこの3人だ。特にエリラスはお前を担いでここまで運んで来たみたいだし、感謝しろよ」

「ありがとうございます。あの、エリラスさん。私は重くありませんか?」

「全然。あとそれ寝言でも言ってたよ」

「えっ?」

「ああ、言ってた、言ってた。エリラスが『軽いよ』って言ったから、『そんな…こと…ないねす…よう…』って言って寝ちゃった」

「片手で余裕でした」

ちよつとドヤ顔をエリラスはして、話を進める。ここからが本題なのに、何故横道にそれるのか。

「でもダメだよノーヴェ。いくら同意の上での喧嘩だからって、こ

んなちっちゃい子にひどいことしちゃ」

「こっちだって思い切りやられて、まだ全身が痛エんだぞ」

その割にはピンピンしている様子のノーヴェ。こっそりと後ろに回り、腹をくすぐろうとするエリアスに気づき、先制の拳骨で仕留める。

その様子を見てあたふたするアインハルトだったが、すぐに復活したエリアスを見てホツとした。

「格闘家相手の連続襲撃犯があなたってというのは……本当？」

確信に迫る質問をティアナはアインハルトにした。そして、周りの空気が真剣さを帯びてくる。

「……はい」

「理由を聞いてもいい？」

ティアナの表情は穏やかなままだ。この年代の少年少女は色々と心が不安定なので、優しく接するのが一番だと考えたのだろう。

エリアスはさほど驚いた様子ではなく、虎視眈々とノーヴェのベークンを狙っていた。話をキチンと聞け。

「大昔のベルカの戦争が、こいつのなかでは終わってないんだとよ。んで、自分の強さを知りたくて。あとはなんだ、聖王と冥王をブツ飛ばしたいんだっただか？」

『ブツ飛ばしたい』のところ、エリマスにさらに拳骨をかまし、言い終わる。エリマスの頭からプシューと煙は出ているが、すぐに起き上がり自分の席に戻って行った。今度はスバルのベーコンを奪いに。

「最後のは、少し違います」

「もう、ないだと…?」

ノーヴェの言葉にすこし認識の違いがあったため、アインハルトは否定し自分の中の思いを改めて確かめるべく、顔を伏せ、拳を握りしめ、今思いを打ち明ける。

「古きベルカなどの王よりも霸王のこの身が強くなること……それを証明出来ればいいだけで……」

何か思い当たる節があるのか、エリマスは目を細めアインハルトを見定める。

「聖王家や冥王家に恨みがあるわけじゃない?」

「はい」

「そう、よかった」

ティアナの問いかけが満足のいく答えだったらしく、ニッコリとスバルが微笑む。その様子にアインハルトは鳩が豆鉄砲を喰らったような表情になる。

「スバルはね、その2人と仲良しだから」

聖王のクローンであるヴィヴィオ、兵器として扱われた冥王イクスヴェリア。イクスヴェリアは未だに眠り続けているが、ヴィヴィオは幸せな生活を送っている。だからスバルはアインハルトの言葉を聞き安心した。

「そういえば、僕は冥王に会ったことないな」

「あれ、そうだったの？」

「ティアさんに保護される前…でしたっけ？」

思い出したかのようにエリアスは口にする。ティアナにエリアスが保護されたのは、一年前で冥王が発見された『マリアージュ事件』のあとだった。

「そうね。ちょっとだけ話をしただけね」

「ヴィヴィオは冥王、イクスヴェリアの友達でしたよね？ 機会があれば会いたいですね」

「うん、わかった…アインハルト、後で近くの署に一緒に行きましょ。被害届出てないって話だし、もう路上で喧嘩しないって約束してくれたらすぐに帰れる筈だから」

「あの…ティアナ。今回のことについては先に手エ出したのはあたしなんだ」

「あら」「へえ…」

いつも彼女を見ている2人は先にアインハルトが手を出したと思っ
ていたので、すこし以外そうにした。まあ、情に流されやすいノ
ヴェエなのだ。

「だから、一緒にあたしも行く。喧嘩両成敗ってやつにしてもら
う。お前もそれでいいな？」

「はい……ありがとうございます」

霸王は少しばかり頬を紅潮させ、軽く頭を下げた。

「じゃ、僕は家に帰ろう……」

ガッ!!!

「めりこんでる痛い痛い!?!」

どっちら色々あるらしい(後書き)

もう、今年も終わりですね。

エリアスのCVって誰がいいですかね？

誰か希望があるかたは挙手！

どうやら私は会えるらしいです(前書き)

今回の話を含めあと4話で一巻終了予定です。終わった後は、一旦3人目のヒロインの話を含み、ヴィヴィオとエリアスの出会いについて書こうと思っています。そして2巻へGO!!

どうやら私は会えるらしいです

Sideエリアス

湾岸第六警防署

「ごめんね、ティア。非番なのに…」

「それはあんたもいつしよでしょ？」

「ねえ、なんで僕は連れてこられたの？ 帰ってダラダラしたいんですけど」

無視。

「しかしあんたってベルカの王様とよく知り合っわねえ」

「ねー」

「アインハルト…。なんであんなにも力んでるのかな？」

「どういうこと、エリアス」

「いや、ずっと気を張っているというか、常に……力を求めているというかき。よくわかんないですけど」

「オルバ、なら知ってるんじゃない？」

「教えてくれませんでした」

ティアさんもスバルさんもオルバのことは知っている。てか、ばれた。精神的に不安定だったときは大変だった。

オルバになつたり自分に戻っていたりと、ストレスと疲労が溜まりまくって、2人はもちろん、ナカジマ家のみんななのはさんや、フェイトさん、八神家のみなさんにも迷惑をかけた。

あれだけ迷惑をかけたのに、今も優しくしてくれるみなさんは……僕には眩しすぎる。自分の周りに太陽がいくつもある感じた。

太陽じゃないって点だけなら、アインハルトは僕と同じだろう。中身は全然違うけどね。

「あいつもワガママね」

『も』ってなんですか、ティアさん。

「アインハルトは色々抱え込んでるみたいだし、このまま放つてはおけないかも」

「そうね……でもその前にあなたの可愛い妹が人肌脱いでくれそうじゃない？」

「ノーヴェって最初からこんな感じじゃなかったですよ。昔は環境の変化に一番対応出来なかったって聞きましたし」

「うん。ウチがひきとった時は結構お父さんとの間に壁があったんだよね。一番厚くて、硬い……ね」

その後の話も聞かせてもらった。家族の休みが重なってキャンプに行った時に、どうやら和解できたみたい。見るからに不器用そうだから、ノーヴェは。

けど、逃げようとせず真っ直ぐ相手にぶつかって自分の意見を言うのは、純粹に尊敬する。……え、スバルさんのパパさんからはちよつとばかり逃げたの……。

「ちよつと様子を見に行こうか？」

「うん」

Side out

「カイザーアーツ 霸王流は私のすべてですから」

2人がいるところに行くと、彼女たちはどうやらアインハルトのことについて話していた。

「……聞かせてくんねーかな？ カイザーアーツ 霸王流のこと……お前の国の事、お前がこだわっている戦争の事」

「……私は……」

悲痛の表情を浮かべ、彼女は重い口を動かし……懺悔するかのよう
に話し始めた――。

St・ヒルデ魔法学院初等科校舎図書室にて、そこには勤勉な生徒
がたくさんおり、己の学を深めるために様々な活動をしていた。

そして、聖王のクローンたるヴィヴィオも、学友であるコロナ・テ
イミル、リオ・ウエズリーと共にとある本を探していた。

「あつた、あつた！　これと、これがオススメ！」

特徴的な髪留め――キャンディー型である――をしたコロナが本を
2冊、そして先日晴れてヴィヴィオのデバイスとなったクリスが1
冊をフヨフヨと浮きながら運んできた。

クリス、正式名称は『セイクリッド・ハート』。姿形は手のひらサ
イズのウサギのぬいぐるみである。大変愛くるしいのでみんなの人
気者になっている。

「ありがとう、コロナ？」

「前にルーちゃんにオススメしてもらったんだ」

「でもどうしたの急に？ シュトゥラの昔話なんて」

「うん、ノーヴェからのメールでね。この辺の歴史について一緒に勉強したいって」

「あ、それから今日の放課後ね！」

2人に向かって、ヴィヴィオは楽しそうに語りかける。

「ノーヴェが新しく格闘技をやってる子と知り合ったから……一緒に練習してみないかって……」

同時刻

「え、アインハルト、学校行くの？」

驚いた表情でアインハルトと向かい合うエリアス。アインハルトの眼は少しばかり泣いたような跡が見受けられた。

「はい。学業は最初が肝心ですので」

「僕も行ったほうがいいのか…？ いやいや、しばらく鍛えてな

かったからジムに行くのも捨てがたいし……よし、学校はサボって
ジムに行こう」

「え、あの、エリアスさんは行かないのですか……？」

「うん」

「す、スマートな返事ですね……。あの、私もついて行っていいで
すか？」

「いいけど、学校は行かなくていいの？」

「まあ、1日くらい大丈夫ですよ……きつと」

「ok。僕は一旦家に帰るよ。アインハルトは？」

「あ、着いて行きます！」

「準備とかないの？」

「大丈夫です、きつと！」

こんな会話があったりなかったり。結構優柔不断な霸王様でした。

「1、2、3、4つと。準備体操は済んだね。昨日言ってたお手合
わせをする?」

「はい、よろしく願います」

「わかった。それじゃ、ここ使わせてもらいますー!」

エリアスがそう叫びと、周りにいた人たちは離れて行った。度々こ
うして使われることを承知でここに来ている人たとなので、すぐに
場所が出来た。

「(霸王流、ちょっとだけでも見せてもらおうか…)」

「(どんな戦い方をするのでしょうか……参考にねば……)」

それぞれの思惑を胸に、手合わせは始まった。

先制はアインハルトからだった。一步踏み込んできてアツパーカッ
トが飛んで来る。すんでのところでエリアスが首を逸らし避ける。

アインハルトの左手がエリアスの腹部を狙うが、それをエリアスの
右手が妨害する。手首を掴んだエリアスはアインハルトを引っ張り、
その隙に左の拳を鳩尾に叩き込む。

「くっ……!」

アインハルトに苦悶の表情が現れる。予想だにしない重さの一撃が彼女を襲う。一旦、後方に下がり状況を立て直す。

「まだ……です……！」

脚に力を入れ再び突進するアインハルト。右頬を抉るように繰り出される攻撃をバックステップを取りながら、手で顔を覆うように防ぐ。

アインハルトの猛攻は続き、一步、また一步と後方に追いやられるエリアスは攻撃の中の一瞬の間を見つけるべく、防御に徹していた。

アインハルトの心に少しの乱れが生じ始める。もう気づけば30を超える攻撃を与えているのに、一撃として決まっではない。

ここはこのまま攻めるべきか……？ いやこのままではギリ貧だ。一撃を……そう、一撃を叩き込めれば……！ と思い霸王流カイザーアーツの技法の一つである『断空』の機会を伺う。

今している攻撃はすべてフェイク、本丸は隙をつき浴びせる一撃のみ。

奇しくもこのとき、2人は同じ考えに至った。勝敗を分かつのはどちらが上手に相手の隙をつくかである。

エリアスが後ろに下がった瞬間を狙い、アインハルトは足先から練り上げた力を拳に乗せ、一撃を叩き込む……！

しかし。

エリアスはまるで来ることわかっていたかのようにしゃがみ込み、両手を軸にして横腹に蹴りをブチ込んだ。

「っ……あ！」

大技を避けられた後というのは、とても大きな隙が出来る。その隙をエリアスに突かれたアインハルトは素直に自分は相手より格下だと悟った。

ふらふらになりながらも立ち上がるアインハルトに対し、エリアスはあっぱれと思った。

「これ以上すると、ヴィヴィオ……ってまあ、さっき話してた子だけど、との勝負に差し支えるから終わろうか」

「はい……お強いですね」

「まだまだ。多分魔法ありだと勝敗わからないし」

「それでも、たった二撃でここまで体力が削られるとは……」

「けどアインハルトの連撃も凄かったよ。ほら、あんまり息が切れてないし」

「そんなことないですよ……実は結構『ぐう』……／／／／／」

突然鳴る腹の音。それはエリアスのものではなく、アインハルトから聞こえてきた。

「もう昼時だし、ちょっとだけ何か食べようか。何がいい？」

「いえ、大丈夫です！ お腹なんか『ぐうぐう』……サンドウィッチがいいです」

「おっけー。確かスバルさんがこの辺りに美味しいサンドウィッチがあるって言ってたっけ……？」

「……あ、財布を家に忘れてしまいました……」

「スバルさんみたいに大食いじゃないなら、僕が払うよ。少しぐらいならどうってことないし」

「……すみません。お手合わせをして頂いたのに……ご迷惑を……」

うつむくアインハルトを安心させるために、彼女の頭を撫でる。最初は恥ずかしかって顔を赤くしていたが、少しだけ笑ってくれた。

「結構楽しみにしてるんだ。アインハルトとヴィヴィオが戦うところ」

「そうなんですか……？」

「うん、たまに手合わせをしたりしてたから。まあ、今日みたいにガチにはならない……けど」

「けど……？」

一旦言葉を止め、アインハルトの眼を見て話す。ヴィヴィオとの勝負を脳裏に浮かべながら思い返すように話し出す。

「あの子の、心と拳は……真っ直ぐだから」

エリアスの確信をもった言葉は、アインハルトの心を揺さぶった。

某所ミッドチルダのカフェテリアにて

そこはデートをしていたカップルが休憩場所として休んでいたり、女性同士がたわいのない会話をしていた。

その一角には、スバル、ティアナ、ノーヴェと、チンクの4人……が集まっているはずだったのだが、何の因果かナカジマ家のウエンデイ、デイエチ。そして聖王教会のオットーとデイードがそこにはいた。

ノーヴェはチンクだけを呼んだのだが、どうやら一緒にいつて来たようだ。話によれば、チンクは止めたようなのだが、『ロリ体型』の彼女にはいかんせん貫禄はないようだ。姉なのに。しかし、そこに萌える。

「見学自体は構わねーけど、余計なチャチャは入れんなよ？ ヴィオもアインハルトもお前らと違って繊細なんだからよ」

『はー！ー！ー！』

ノーヴェとチンクは心の中で無駄なんだろう、と思いつつも一応4人のことを信用しておいた。

「ノーヴェ！ みんなー！」

元気な声で8人を呼ぶ声が聞こえる。それは今日行われる『世紀の大勝負！』 時を越えた戦い『聖王VS霸王』の対戦カードの聖王の方、すなわちヴィヴィオである。

「あれれ？ スバルさんとティアナさんまで！」

「こんにちはー！」

ヴィヴィオの学友のコロナと、リオの2人も来ているようだ。3人の元気な様子が伺える。

「あー、やかましくて悪いな」

「うっん、全然！」

「で、紹介してくれる子は？」

「さっき連絡あったからもうすぐ来るよ」

「何歳くらいの子？ 流派は？」

「年はお前の学校の中等科1年だ。流派は……」

ノーヴェが流派を答えようとしたとき、少しばかり言い淀む。まだ、相手が霸王の末裔であることを隠したいようだ。

「まあ……旧ベルカ式の古流武術だな」

「へー！」

どうやら上手い具合に誤魔化すことができたようだ。そして、さらに誤魔化すために話を逸らしにかかる。

「あとアレだ。お前と同じ虹彩異色」

「ほんとー!?!？」

「まあ、ヴィヴィオ。座ったら？」

「そうそう」

「あ………そうですね!」

ヴィヴィオがそうやって椅子に座った途端――。

「……失礼します」

ここに、今を生きる聖王と霸王の出会いが為された……。

「あれ、人が多すぎない？」

困惑するエリアスだった。

やっぱり私は会えるらしいです（後書き）

4人目のヒロインはまだまだ出てくれません。あしからず。

どうやら、私は……。 (前書き)

今回は意味不な回でござる。

あ、新年明けましておめでとござります！

どうやら、私は……。

4年前――。

『J・S事件』と呼ばれる大型都市テロにおいて、八神はやて率いる『機動六課』のメンバー、高町なのはやフェイト・テストロッサ・ハラウオンの活躍により事件は終結した。

このテロの際、『聖王のゆりかご』と呼ばれる超大型質量兵器が使用された。過去の聖王達がここに生まれ、育ち、そして死んで行ったことから名付けられたこの兵器は、オリヴィエを『最後のゆりかごの聖王』として歴史上から姿を消した筈であった。

しかし、主犯であるジェイル・スカリエッティが、聖王の遺伝子情報から造られたヴィヴィオを聖王の鍵としこれを起動させた。

数kmにも及ぶ艦内で繰り広げられた戦いは熾烈を極めた。己のトラウマに打ち勝ち仲間ピンチを救った者や、ガシエツト？型という種類の兵器数百体に対し、勇敢に挑んだ騎士、そしてゆりかごを止めた白き者。

出合いがヴィヴィオを強くし、己の暴走を止めた彼女に憧れ、彼女が母であることを誇りに思える――優しい人になりたいと強く思う。

そんな運命を乗り越え、ヴィヴィオは。新たな一步を踏み出そうとした――。

Side アインハルト

武技において最強の名を手にした王女がいた。名を……オリヴィエ・ゼーゲブレヒト。

かつて『霸王イングヴァルト』は彼女に勝利する事が出来なかった。

見間違えることのない紅と翠の瞳^{ロートグリュン}。それは霸王の記憶に焼け付いた聖王女の証である。紅と翠の双眸を持つ彼女・・ヴィヴィオさんと対面している私は、あの時ノーヴェさんに話したことを思い返していた。

「それで時間を超えて再戦……か？」

「霸王の血は歴史の中で薄れていきますが、時折、その血が色濃く蘇るときがあります。碧銀の髪やこの色彩の虹彩異色、霸王の身体カイザーアーツ資質と霸王流」

これだけの過去の遺産を受け継いでも、常に精進して努力を積み重ねても、彼の背中はまだ霞んでしか見えない。

かの聖王は、さらにその先の地平線の彼方。そして霸王は追いつくことが出来ず、彼女は死んでいった。皮肉にも、それが更なる道しるべにもなった。

「それらと一緒に少しの記憶もこの身体は受け継いでいます。私の記憶にいる『彼』の悲願なんです。――天地に覇を以って和を成せる……そんな王であること」

いつしか、記憶を見る中で彼の悲願が私の悲願にもなっていました。だからこの憤りのない気持ちはどうすればいいか、知るすべを私は持たない。

「弱かったせいで、強くなかったせいで――」

「――彼らは彼女を救えなかった……護れなかったから……」

心中を暴れる感情は決壊し、涙という形で私の頬を流れる。この感情は、私のものであり、彼のものでもある。

それだけに――抑えきれない。

「そんな数百年分の後悔が……私の中にあるんです……。だけど、この世界にはぶつける相手がもういない。救うべき相手も、護るべき世界も……」

心の激流のなかで、あの人なら受け止めてくれるかもしれないと、思った。けどあの人――エリアスさんは何も知らないから……。

ふと、自分がさっき言った事を思い出す。

私は、確か…… 『彼らは彼女を……？』

何かがおかしい、なぜ、なぜ、何故？

どうして、どうして『彼ら』なんですか……？

頭が混乱する。わからない、わからない。

霸王は1人、彼女の死を……悔やみ、自身を憎み、弱さを捨て、強さを求めたんじゃない……？

一つの答えが浮かび上がる。単純故に、最も理解が出来ない事象。自分の信じていたものが間違っていたかもしれないという不安感がそれを否定する。

何が変わった？

認めたくない、信じたくない、理解したくない。

何が変わった？

聞きたくない、知りたくない、黙っていて。

- -これが真実だ - -

私の記憶が……霸王の記憶が変わった……？

「……………おい……………おい！」

「……………あ……………すみません、ノーヴェさん……………」

思考が心の奥底から引き上げられ、ノーヴェさんの声で平常心に戻される。まだ重い頭が思考の邪魔だてをする。

「大丈夫かよ？ 本当に……………。もう一回言っぞ。あたしの知ってる限りだけだよ、お前の拳を受け止めてくる奴はいる。あたしが言うんだから間違いないエよー！」

- - 果たして、本当なのか。

思考が終わりを告げる。相対する彼女は私の拳を、霸王の悲願を受け止めてくれるのでしょうか？

身体に魔力を浸透させ強化を施す。足元には、ベルカの魔法陣が展開され輝きを放っていた。

「んじゃ、スパーリング4分1ラウンド。射砲撃と拘束バインドはなしの格闘オンリーな」

ノーヴェさんの開始の合図を待つ間、身体を身構え、意識を相手の動きを読むことに集中する。

トントントントント...

相手は一定のリズムをとって、恐らく突撃チャージをしてくるのでしょう。わかっている攻撃ほど、御しやすいものはないです。

「レディー、ゴー！」

トントントントント!

音が変わった。速い。しかし、予想外ではない。眼前に接近しているヴィヴィオさんがアッパーを繰り出す。予想の範中の攻撃はいくらでも防げる。

先ほど戦ったエリアスさんは……凄かった。行動を抑制され、起死回生の一撃を放とうとも回避され、その隙をつかれ敗北を期した。魔法戦ならわからないと言っていたが、それは相手も同じ土俵に立つということ。

自分だけが使えて相手は使えないという状況ではない……。魔法の得意、不得意はあれど恐らく魔法を絡ませた戦法はまた一つ上の段階にあると思う。

連撃は続く。けど避ける、ないしは防御しているため特にダメージはない。

- - 蹴りが飛ぶ。顔を背け避けてしまったから反撃には移れない。

- - ああ、エリアスさんの言った通り、この子はとても真っ直ぐだ。技も心も、私とも、彼とも決定的に何かが違う。

優しい子なんだ。きっと。

だから。

この子は、私の戦うべき『王』ではないし。優しすぎるこの子には……私の拳は向けられない。

ズドンッ！

隙をつき、左手を心臓部に押し当てる。空気を裂き、相手の身体は宙に浮いている。

何が起こったのかわからないのか、思考が停止しているように見える。しかしあのままでは受け身をとれず……。

心配は杞憂に終わる。彼女を陛下と呼び親しむ2人の……確かオットーさんとデイドさんが彼女を受け止めた。

周りを流れる風は平常に戻り、戦いの跡は消えていく。見るとヴィ
ヴィオさんがブルブルと震えていた。

「す……」

恐らく、『すごい』と思ったのでしょう。表情はまるで夏に咲くひ
まわりのように元気というのか、今なら尊敬とでも当てはまるのか、
色々な感情が混ざり合い笑顔になっていた。

それ故に、私は……違うと感じた。

「お手合わせ、ありがとうございます」

踵を返し、振り向きざまに一礼。ああ、身勝手過ぎる。折角、機会
を設けてもらったのに、ただ迷惑をかけたただけだなんて。

「あの……あのっ！……すみません、私何か失礼を……？」

「いいえ」

単に彼女は霸王の拳を向けていい相手ではなかっただけ。それだけ。
彼女は何も失礼なんかを私にかけていない。

もとより期待はあまり無かった。いくらノーヴェさんが言っても、

あの暗い世界の事を知らない彼女は……あまりに眩しい。積み重ねた後悔と苦痛を滲ませた霸王の拳は、彼女にぶつけていけない。そう思った。

「じゃ、じゃあ、あの……わたし……弱すぎました？」

「いえ……趣味と遊びの範囲内でしたら充分すぎるほどに」

少し言葉に棘が出る。心の暗雲が払いきれず吐露してしまっている。……こんな事を言えば、彼女が傷つくのがわかってるのに。

「申し訳ありません、私の身勝手です」

「あのっ！ すいません……今のスパーが不真面目に感じたのなら謝ります！ 今度はもつと真剣やります。だから……もう一度やらせてもらえませんか？ 明日でも……来週でも……！」

私は彼女との試合に意味を見出せない。それにコミュニケーションをとるのは下手だから、さっきみたいに彼女を傷つけるかもしれない。だから、私はノーヴェさんに助けを求めた。

「あー、そんじゃまあ、来週またやっか？ 今度はスパーじゃなくてちゃんとした練習試合でさ」

例え意味が無くとも、練習にはなる。それに今の私は藁にもすがら思いだ。気持ちの何処かにまだヴィヴィオさんに期待している自分がいるかもしれない。

「ああ、そりゃいいッスねえ」

「2人の試合、楽しみだ」

「はいっ！」

「……わかりました。時間と場所はお任せします」

「ありがとうございます！」

そういえば、エリアスさんがこんな事を言っていた。『世の中には上には下を、正には悪を、勝ちには負けを、と正反対のものが1セットになっている。必ずしも同じものだけがセットになってるんじゃない』

私には言葉の意味がよくわからない。けど、彼女なら……ヴィヴィオさんなら、私より長くエリアスさんという。もしかしたら……わかるかもしれない。

淡い希望。カンダタの前に吊るされた一本の細い蜘蛛の糸のような希望は、私は彼女ともう一度戦うことを決めさせた。

S i d e o u t

聖王VS霸王の戦いは、不完全燃焼のまま終わり、それぞれに微妙にはわかりに言い難い結果を残した。

ヴィヴィオには『自分は未熟者なのに、不真面目で弱くてがっかりさせてしまった』と、更なる修練のきっかけをつくった。実際は、違っただが、事情を知らない彼女には知る由も無いだろう。

アインハルトには『新たな可能性の提示』をし、再戦への思いを募らせる。果たして彼女は何を見つけるのだろうか。

来週にある練習試合に備え、夕食をなのはと食べ終えたヴィヴィオは、既に練習を開始した。いつまでも立ち止まらず、新たな一歩を踏み出す勇気を持っているのが、ヴィヴィオの美点だ。

「（あの人の、アインハルトさんが求めているのはわからないけど、精一杯伝えてみよう）」

今日のスパーでは、彼女は途中で急にやる気をなくしてしまった。何故だかはヴィヴィオのはわからない。けど、伝えたい。あの時、

伝えられなかった気持ちを、胸の奥に秘めたこの気持ちを。

「（高町ヴィヴィオの本当の気持ちを……！）」

決意を胸に、期待と希望を全身に滾らせ、ヴィヴィオは全身全霊を込めて戦うことを決めた。

一方、アインハルトとエリアスは……。

「……で。正直どうなんですか？ 纏めたような、ぐちゃぐちゃなような感じでワケワカメなんですけど」

「……はい……ヴィヴィオさんはやっぱり霸王の拳をぶつけていい人ではありません。彼女は……優しすぎるんです。私のように、痛みを背負っていないから……この拳を向けられないんです……」

アインハルトを送っていくため、ティアナの車に乗った2人。エリアスもいる理由は、単純にアインハルトの家に近いからである。

家までは時間がかかるので、エリアスがアインハルトに今日のスパーについて問答をしているところだ。

「……そっか。じゃあ、それは、霸王たる君の拳なのかい？ それとも……」

「……………確かめたいんです。この拳は私であって霸王わたしです。彼女へ向ける拳は……………どちらなのかを……………！」

心の中のモヤモヤが少しスッキリしたのか、俯き気味の表情が変わり、希望を含んだ眼差しをエリアスに向けた。

「時間はあるさ。ヴィヴィオだって今度は本気でくる。ぶつければいい。自分と……………相手のことを知るには……………それが1番手っ取り早いからね」

「……………エリアスさん。明日、練習に付き合ってくださいませんか……………。ヴィヴィオさんには悪いことをしました。消化不良で、少しウズウズしてるんです」

「りょーく」主よ、伝達だ。ヴィヴィオ様より送られた『堅苦しいのはいいから、普通にメールでいいって……………』

『……………』

「はあ……………表示して」

『御意』

ガーディアンが知らせたヴィヴィオから届いたメールには、こんなことが書かれていた。

『ヴィヴィオです！ あの少しお願いがあって……………明日、一緒にトレーニングしてくれませんか？ 実は消化不良で……………。都合が合ったらでいいので……………』

「……もう、明日すればいいんじゃないの？」

「そ、そういつ訳にもいきません！ 色々と……そう！ 色々あるんですー！」

「……さいですか……」

結局、明日は土曜日ということで、朝はヴィヴィオ。昼はアインハルトという運びになりエリアスの心労は増加していった。

「（霸王の拳……ぶつきたいのなら、僕はいつでも受け止める覚悟はあるよ）」

心に灯した口にしない思いは、霸王に届くことなく、胸の中を渦巻き……。

第一の歯車は『ガチャリ』と錆び付いた音をたて、第一の歯車と噛み合った。

どうやら、私は……。 (後書き)

あと2話でVictor編が終わります。

前にも言ったヴィヴィオとエリアスの出会い、第3のヒロインのお話を挟んだあと、2巻、3巻の内容に入ります。気持ち、駆け足になりそうです、はい。4日間の練習が終わった後で第4のヒロインのお話を。そしてアインハルトのデバイスのお話が終わったあとに……。以下禁則事項でし。

どうやら私は風邪らしいです（前書き）

物語はひとまず、終焉を迎える。しかしそれは新たなる灯火を宿らせるための神が与えし休日ではない。

て、ミスった！！！ 予約するの忘れてた！

というわけで、本文は誠にかつてながらヴィヴィオのところまでにさせていただきます。1月の9日に、アインハルトのほうを追加します。

アインハルト「ご、ごめんなさい！！！！！！」

どうやら私は風邪らしいです

Side エリアス

「ヴィヴィオ、おはよう」

「おはようございます、お兄ちゃん!」

元気な声。聞くだけでこちらも元気をもらえる、優しさを含んだ声が返ってきた。

昨日、アインハルトとスパーをして落ち込んでいると思っていたら、もうすでに来週に向けて特訓を開始してるらしい。

『らしい』っていうのは、僕がノーヴェから聞かされたことだ。僕と入れ替わりでノーヴェは帰っていったが、色々忙しいんだろう。2人の試合の場所取りとか、他の用事とか。

「もう準備体操は済んでるから、まずは何からする?」

「スパーをしましょう!」

場所は例の公園。やっぱり走ってきた。けど今回は寄り道はしなかったから、30分くらいだったけど。

てか、すぐスパーって……どれだけ不完全燃焼なんだろうか?

アインハルトもそうだったけど、もう今日すればいいんじゃないかと思うほどやる気に見ていた。あの、あれ。漫画とかである眼が燃

えているやつ。ちょっと引くぐらいのやる気だった。

「スパーは後にして……僕に本気で打ち込んできて」

「ふえ？ ……うん、わかった！」

「一撃を入れられたら、ヴィヴィオの勝ち。僕は避けるか、防御し
かないよ」

昨日のスパーでは、殆どの攻撃が防がれたり避けられたりしてヴィ
ヴィオの攻撃は意味を成さなかった。だから今日は『いかにして決
定打を与えるか』のトレーニング。

「ねえねえ、お兄ちゃん！ もし勝てたら……言っ事を一回だけ聞
いて？」

「ん……いいよ」

ヴィヴィオのストライクアーツの基本戦術の見極めも兼ねてたりす
る。まだこれといった戦術、自分の得意のやり方を固めていないヴ
ィヴィオにはちょうど良かったりする。

ドサクサに紛れてとんでもない約束をしてしまった気がするが、負
けなければいいだけだ。そう……負けなければ。なんかヴィヴィオ
様のお背中からオーラが溢れ出てきてなんだこれくぁwse drift
gyふじこip。

閑話休題。

「それじゃ、よい……スタート！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7680y/>

どうやら僕は二重人格らしい

2012年1月4日11時55分発行